

2018.10 のブログ：「幼児の自己中心言語と内言の関係」の詳細

(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index.html#1810b> )

## 「幼児の自己中心言語と内言の関係」

### ■この調査のきっかけ

直前のブログ執筆時のコメント関連調査中に、私が修士論文（1971）で言及したヴィゴツキーの考え、すなわち幼児の自己中心言語を思考言語（内言）の習得過程と見なす考えが、現在の心理学の主流とのページが複数見つかったので、調べてみた。

私に先見の明があったということ？（^^）

（私の修論の第一章「思考の解析」の1.1節「心理学から学ぶこと」からの引用）

（参考）<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/shuuron.htm>

『特に言語機能を外言（音声言語、コミュニケーション言語）と、内言（思考言語）の二つに分離して議論したヴィゴツキーの理論は、かなり思考の本質にせまったものと思われるので、以下、彼の理論に少し詳しく触れておく』

『内言では、逆方向の、外から内に進む過程、言語が思想へ気化する過程であるという。この内言の研究にあたり、彼は幼時の自己中心言語に注目し、最初に、この研究で実績のあるピアジェを再び批判し、自己中心言語は、内言の発達に先行する一連の段階であり、これは、ピアジェのいうように6歳ごろに消滅するのではなくて、内言へと移動し、成長、転化することを明らかにした。』

### ■調査概要

以下の3種類のキーワードでの google 検索の結果（2018.10.21）：

「内言と外言」 約 349,000,000 件（0.37 秒）

「幼児の自己中心言語」 約 2,090,000 件（0.37 秒）

「ピアジェ ヴィゴツキー」 約 9,270 件（0.29 秒）

### ■調査結果（その1）

上記の3種類の検索で結果の順位が {1番, 1番, 5番} のページの内容を紹介する。

【心理学用語集】内言・外言

（参照ページ）<https://psychoterm.jp/basic/development/08.html>

<以下、関連部分の引用・要約>

ヴィゴツキーは、人間の発話のレベルを「内言」と「外言」に分類。  
内言とは、音声を伴わない内面化された思考のための道具としての言語。  
外言は、通常の声声を伴う、伝達の道具としての社会的言語。

ヴィゴツキーによれば、発達的には「外言から内言へ」と移行していくとされる。

内言の分化は、幼児期に始まるものの、この分化が不十分な段階では、思考に外的な発声が伴ってしまい、この不完全な内言が幼児期の独り言であると考えた。

ピアジェは「内言」ができてから「外言」ができる、つまり、思考ができるようになってから話し始めると考えており、ヴィゴツキーはこれに対立する形をとった。

ヴィゴツキーはこれを真っ向から批判し、ピアジェの言う自己中心性言語は、内言と外言の分化が不十分な段階のもので、外言から内言へと進化していく過程であるとした。

社会的環境と双方向のコミュニケーションが介在した言語・思考の発達を重視し、自然的かつ自生的に言語・思考が発達していくとしたピアジェの「生物学的な人間観」を批判した。

もう少し具体的に言うと、子どもの心身や言語の発達は一人だけで自然に進むものではないということを強調しているということです。社会的環境、例えば、親子関係・子弟や友人との関係の中で、他者との相互作用および大人からの教育を受けることによって初めて実用的な言語能力の発達が進むとヴィゴツキーは主張したのです。

以上

## ■調査結果（その2）

上記の3種類の検索で結果の順位が {6番, 2番, 1番} のページの内容を紹介する。

【-心理についての面白くて深い話-】 2015/04/01

ピアジェとヴィゴツキーで違う!? 内言と外言, 自己中心的言語とは

(参照ページ) <http://psychjapan.com/390.html>

<以下、関連部分の引用・要約>

**ピアジェの言語発達の考え方は、簡単に言うと「内→外」です。**

先に頭の中で使う言葉が身についてからコミュニケーションに使うようになると考えた。

ヴィゴツキーの言語発達の考え方は「外→内」でした。  
よくわからないながらも、他者とコミュニケーションをとることで外的な言語を獲得し、しだいにそれが頭の中でも使えるようになっていくと考えた。

自己中心的言語とは、音声を伴うことばでありながら、発言の内容はその人の思考の内容であるものをいいます。

ピアジェはこの自己中心的言語を、内言から外言への移行期に現れるものとした。  
自己中心的言語は、思考をうまく伝えられない子どもの幼さの現れであるとした。

ヴィゴツキーは自己中心的言語が移行期に現れるものではあるが、それはコミュニケーション機能と思考機能の両方を兼ね備えたものであるとした。  
つまり、それまでコミュニケーションのみに使っていた言葉を、しだいに頭の中で思考に使えるようになっていく時に現れると考えた。

いまでは、「外言→自己中心的言語→内言」という流れで、子どもの言語発達を理解することが主流となっているようです。

以上

### ■調査結果（その3）

上記の3種類の検索で結果の順位が {2番, 3番, 19番} のページの内容を紹介する。

【知育ノート】2017-07-27

内言と外言(内言語と外言語)の意味とは？ 発達には外言が先？ 内言が先？

(参照ページ) <https://www.chiikunote.com/entry/internalspeech>

<以下、関連部分の引用・要約、上記1, 2との重複部分は省略>

ピアジェとヴィゴツキーの考え方は、その後も多くの研究者によって研究が重ねられ、現在はヴィゴツキーの考え方が支持されています。

内言と外言は、いずれも子供が社会生活を送るために不可欠な能力であり、バランスよく身につけていくことが求められるものですが、いずれも子供が一人で伸ばしていくことはできません。親が子供に関わることをはじめ周囲の人とのコミュニケーションが欠かせませんし、新しい刺激にたくさん触れさせることも重要です。

以上

## ■過去のヴィゴツキー関連の私のブログ

2018.5：解説「子どものコモンセンス知識」でヴィゴツキーが引用されている

<http://www.1968start.com/M/blog/index.html#1805c>

2015.8：なつかしのヴィゴツキーが人工知学会誌の学習に関する論文で引用されている

<http://www.1968start.com/M/blog/old.html#1508b>

2014.7：なつかしのヴィゴツキーが汎用人工知能A G Iで注目されている

<http://www.1968start.com/M/blog/old.html#1407>

2008.3：40年近く前に読んだヴィゴツキーの「思考と言語」が注目されているらしい

<http://www.1968start.com/M/blog/old.html#0803c>

以上